

第 I 章 序 章

1 平城京の発掘調査

この発掘調査報告書は、1984年から1986年にかけて、奈良県大和郡山市九条町において実施した発掘調査の記録である。奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部は、平城宮跡の調査研究及び宮跡の整備を目的として、1963年に設置された調査研究機関であるが、平城宮跡とは不可分の関係にある平城京跡についても重大な関心をよせ、現在に至っている。

都城建設に関する土木工学的な問題、宮殿と寺院との比較、官衙と住宅との対比、あるいは宮と京の両地域から出土する遺物類の共通点と相違点など、多くの解決を要する課題が山積しているのである。すなわち、古代の都城を明らかにするためには、宮と京のいずれを欠いても片手落ちであり、両地域の状況を的確に把握することによってのみ、古代都城の真実に肉迫できるのである。このような主旨に沿って、発掘調査部の創設以来、平城京内の各地で発掘調査を行ない、少なくない新資料を公表してきた。

1960年代の終わりから1970年代初期の調査では、国道24号線バイパス工事に伴う事前調査が大きな課題であった。この調査では、平城宮跡の範囲が従来推定されてきた方八町の範囲ではなく、さらに東方に広がることが明らかとなり、路線を変更し、特別史跡の範囲を拡張して宮域を保存することになった¹⁾。また、迂回先の左京東三坊大路の調査では、奈良時代から平安時代にかけての良好な遺構と遺物を発見し、平城京域が予想以上によく保存されていることを確認した。しかし、この段階では調査体制が不備で、路面敷の多くの地点に未調査地を残さざるを得なかった。1971年から1973年にかけては、近鉄西大寺駅付近の開発が活発化し、デパート、銀行などが水田のなかに突如として出現する開発ラッシュとなり、建設に先立つ発掘調査によって、奈良時代末期の尼寺である西隆寺³⁾を明らかにするなどの成果を得た。

平城京の正門である羅城門と中心街である朱雀大路に対する関心は根強く、大和郡山市の要請によって、1970年には羅城門⁴⁾、1974年には奈良市の要請によって朱雀大路⁵⁾の規模を確認し、保存のための有力な資料を得た。この間、岸俊男氏を中心に進められた「平城京遺存地割」の研究成果にもとづき、京域の骨格ともいべき大路・小路など道路敷の調査を意図的に進め、地上に姿をとどめる遺存地割が、平城京の地割を忠実に踏襲していることを随所で確認した。

1) 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報 1966』p. 37 (以下、『年報1966』等と略記する)、同『年報1967』pp. 35・42。
2) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告 VI』平城京左京一条三坊の調査(学報第23冊) 1975 (以下『平城宮報告VI』等と略記する)。
3) 西隆寺調査委員会『西隆寺発掘調査報告書』

1976。

4) 大和郡山市教育委員会『平城京羅城門跡発掘調査報告』1972。

5) 奈良市『平城京朱雀大路発掘調査報告』1974。

6) 奈良市『平城京の復原保存計画に関する調査研究』1972及び註5) 前掲書第三章。

1973年、1974年に行なった奈良市役所建設予定地の調査は¹⁾庁舎敷しか発掘できなかったが、
高級貴族の邸宅構造が初めて姿を現した調査である。1974年の奈良県営姫寺団地における調査²⁾
では、東市付近に定住した庶民の住宅地が明らかになり、都市生活者の生活形態を解明する糸
口を得ることになる。このような居住者の階層が異なる二つの遺跡を比較することによって、
条坊内における生活条件を所属階層ごとに区別して理解できるようになってきた。 *

1975年、奈良郵便局建設予定地では画期的な発見があり、平城京の発掘調査の重要性が改め
て認識されるところとなった。それは邸宅の中心部に設けられた庭園が、極めて良好な状態で
残り、しかも従来の庭園史では予想すらできなかったもの、だったからである。その後、この
遺跡は国の特別史跡として保存された。³⁾

京域内の寺院については、大安寺、西大寺、東大寺、法華寺などの旧境内について随時調査 *
し、上述のように全く消滅してしまった西隆寺の寺域についても明らかにした。一方、薬師寺
の昭和再建について、計画段階から協力し、発掘で得た成果にもとづいて復興を進め、現在も
なお続行中である。⁴⁾

1970年代後半から1980年代にかけては、新市庁舎を中心とする大宮通り沿いの開発工事が急
速に進展し、美田を誇ってきた平野部における緊急の発掘調査が激増してくる。今回報告する *
大和郡山市北部清掃センターにかかわる発掘は、そのなかでも規模の大きいものであり、铸造
関係工房に関する新たな問題を提起した遺跡である。1986年からは平城宮跡の東南方で、デバ
ート建設地を対象とする大規模調査を実施し現在もなお継続中だが、「長屋王」の邸宅である
ことが判明するとともに、これまでに例を見ない邸宅内の様子が明らかになりつつある。⁵⁾

以上は、当調査部が行なってきた平城京関係の調査の一部であるが、ほかにも多くの調査を *
行ない、古代史研究に豊かな資料を提供している。またこれらの調査をつうじて、平城京に対
する理解は一層精緻なものとなり、例えば庶民の宅地班給、住宅構造、土器の消費形態、木製
祭祀具の分析などのように、これまでには考えられなかった新しい問題も提起されている。だ
が、このような成果に手放しで酔いしびれているわけにはいかない。なぜならば、それらの遺
跡の大多数はすでに存在しないからである。 *

現状では、急速な開発工事に対応するため、奈良県教育委員会、奈良市教育委員会、大和郡
山市教育委員会、及び当発掘調査部が連携を強め、調査地の分担などについての協議を行なっ
ているが、必ずしも十分な成果をあげていない。つまり、日常的な開発にともなう調査に右往
左往し、遺跡の長期ないしは永久的な保存を目的とする調査が後退してしまっているからであ
る。とはいえ、奈良市による東市跡、奈良県による松林宮跡の調査のように、保存を前提とす *
る調査もなくはないが、それらすら将来の保存に関しては悲観的にならざるをえない。現段階
において、平城京跡に対する基本的な保存策を早急に講じなければ、地下の平城京は早晩に壊
滅するであろう。

1) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊』1975。

2) 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊
発掘調査概報—東市周辺東北地域の調査』1976。

3) 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊
六坪発掘調査報告』1986。

4) 奈良国立文化財研究所『薬師寺発掘調査報
告』1987。

5) 奈良国立文化財研究所『昭和61年度平城宮跡
発掘調査部発掘調査概報』1987, p. 61 (以下、
『昭和61年度平城概報』と略記する)。『年報
1987』p. 31, 『昭和60年度平城概報』1986, p. 44。

2 報告書の作成

今回報告する調査は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部による1984年度の第156-32次調査、1985年度の第168次南及び第168次北調査、1986年度の第179次調査を中心とし、これに先行して行なわれた大和郡山市教育委員会による1984年度の調査（担当者 服部伊久男）*の成果の一部をあわせて収録した。以下、発掘調査責任者と、発掘担当者、発掘調査関係者を列記する。

次 数	年 度	所 長	平城宮跡発掘調査部長	発掘調査担当者
第156-32次	1984	坪井 清足	岡田 英男	千田 剛道 工楽 善通 上野 邦一 巽 淳一郎 本中 真 杉山 洋 館野 和己
第168次南	1985	坪井 清足	岡田 英男	千田 剛道 田中 哲雄 山本 忠尚 松村 恵司 山岸 常人 館野 和己
第168次北	1985	坪井 清足	岡田 英男	杉山 洋 工楽 善通 上野 邦一 綾村 宏 巽 淳一郎 本中 真
第179次	1986	鈴木 嘉吉	町田 章	本中 真 綾村 宏 毛利光俊彦 松本 修自 井上 和人 玉田 芳英

報告書の作成は、1987年度から開始し、遺構関係の整理については遺構調査室・計測修景調査室があたり、遺物については木製品・金属製品関係を考古第一調査室、土器類を考古第二調査室、瓦埴類を考古第三調査室がそれぞれ分担し、木簡・漆紙文書・墨書土器については史料調査室が担当し、歴史研究室が協力した。本書全体の構成については随時行なった検討会の成果に立脚している。執筆分担は次のとおりである。

第Ⅰ章	1 町田 章	2 千田剛道
第Ⅱ章	1・4 B, C 千田剛道	2・4 A 服部伊久男（大和郡山市教育委員会）
	3 千田剛道 本中 真	4 D 杉山 洋 4 E・5 本中 真
第Ⅲ章	1・2 G 千田剛道	2 A～E 島田敏男 2 F 井上和人
第Ⅳ章	1 A・2・3・10 松村恵司（現文化庁記念物課文化財調査官）	1 B・5 井上和人
	4 千田剛道 服部伊久男 玉田芳英	6 館野和己（現奈良市文化課長） 7 小林謙一
	8 松井 章 9 光谷拓実	
第Ⅴ章	1 本中 真 2・3 島田敏男	4 光谷拓実 5・6・9 松村恵司 7・8 館野和己
	10 千田剛道	
英文要旨	佐々木憲一（米国ハーバード大学）	

遺構・遺物の写真撮影は佃幹雄、八幡扶桑が担当し、遺構写真の一部（PL. 21・35-4）は服部伊久男の撮影による。遺物の理学分析及び岩石の鑑定は肥塚隆保が行ない、樹種同定・種子同定は光谷拓実が行なった。図面浄書はそれぞれ執筆者が分担したほか、岩永省三の助力を得、写真図版作成に寺崎保広の協力があつた。なお正倉院文書写真の掲載については宮内庁正倉院事務所の許可を得た。

本書の編集は町田 章の指導のもとに千田剛道が担当した。